

(3) 指導に生かす評価の工夫～「指導と評価の一体化」に向けた取組～

ア 仮説

それぞれの事業の目標に合わせて作成した評価基準(ルーブリック)や客観的評価の仕組みを開発することで、到達目標を意識した成長を促すと共に、実践的で汎用性のある評価基準を確立する。

イ 活動実績

カリキュラム開発の専門家である大学教授等に指導を受け、それぞれの事業での効果的な評価基準を策定する。また、学校設定科目「ヒューマンサービス」に関する評価基準を作成し、その評価を次の指導に生かす PDCA サイクルを確立する。

ウ 実施効果とその評価

- (1) 探究活動を評価するルーブリック
- (2) 発表を評価するルーブリック
- (3) 技術の習得を図る can-do リストを作成
- (4) 評価法も含めた授業の進め方や、教科におけるアクティブラーニングについて教員研修を実施
- (5) カリキュラム開発専門家からアドバイスを受ける。
- (6) 生徒がポートフォリオ評価を行い、生徒の能力向上を自覚できるようにする。

令和4年度に「指導と評価の一体化」を目指して(1)～(6)の研究を実施予定である。

4 委員会等実施報告

(1) コンソーシアム委員会実施報告書

令和3年度 兵庫県立佐用高等学校 第1回コンソーシアム委員会

1 日時 令和3年5月21日(水) 14:00~15:30

2 場所 兵庫県立佐用高等学校 会議室

3 出席者

(1) コンソーシアム委員

庵途典章氏(佐用町長)

井上洋文氏(佐用町自治会連合会長)

西川典男氏(佐用町教育委員会教育課 教育推進室長)

田和久典氏(IDECC株式会社グリーンソリューション事業部長)

松田圭介氏(ナニワフード株式会社)

水野博氏(日本調理製菓専門学校 校長)

小山和也氏(美作市スポーツ医療看護専門学校 事務局事務部長)

久保正彦氏(一般社団法人 ドローン減災士協会 代表理事)

武田由哉氏(兵庫県立山崎高等学校 校長)

神田貴司氏(兵庫県教育委員会高校教育課 主任指導主事)

永田智子氏(兵庫教育大学 教授) ※リモート参加

作野広和氏(島根大学 教育学部教授) ※リモート参加

(2) 佐用町 地域協働学習支援員 服部憲靖氏(佐用町企画防災課)

(3) 佐用高等学校 西坂美樹(校長)、上田貴哉(教頭)、岩崎由香子(教諭)、小寺由夏(教諭)、岡祐依(教諭)、多々良里奈(教諭)、高橋智美(臨時講師)、中田真佑(臨時実習助手)

4 次第

(1) 資料確認・コンソーシアム委員会設置要綱説明・委嘱状交付

(2) 開会

① 開会のことば

②-1 校長挨拶(佐用高校 西坂校長)

- ・本校はこれまでも専門学科として、地域との協働を行ってきたので、本事業の趣旨に向いていると判断。
- ・佐用町の課題を庵途町長にお聞きし、佐用町・作野先生・高校教育課と何度も会議を行ってきた結果、本事業のテーマ設定に行き着いた。
- ・家政科はこれまでに既存科目での協働はあったが、今後新しいカリキュラムで展開。

②-2 委員代表挨拶(佐用町 庵途町長)

- ・佐用町唯一の高校であり、地域の伝統校として地域を支えていく人材の育成に取り組んでいる。

- ・佐用町が現在取り組んでいる次世代農業での学びを、教育活動の中で実践中。
- ・本事業には高い評価と大きな期待をしている。
- ・教育活動の中で、地域の特産物を自分たちで育てて学んでいく。生徒自ら食生活を正し、健康な身体で伝授していく。地域で生産された物を消費し、生活そのものから健康づくりを。

(3) 出席者紹介

(4) 司会選出

(5) 議事

- ① 令和2年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型）」研究開発事業報告について
- ② 令和3年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型）」研究開発事業計画について
- ③ 意見交換

水野氏（みかしほ）

- ・震災現場ではお弁当が山積みに残ってしまう現状もあることから、食べる側はただ食べるだけでなく、温かいもの、出来立てのもの、心のこもったものがよいのではないか。
- ・ガスや水道が復旧した状態で作れるパッククッキングや、炊飯クッキングというご飯で栄養を保てるようなもの。
- ・ご飯を牛乳で炊くミルクライスにシーチキン缶やミックスベジタブルなどの生野菜を切ったりせずに、見た目も綺麗で栄養もある程度補えるもの。
- ・学生カフェでは料理と皿盛りのデザートの組み合わせの評価が良い。（生野菜と煮野菜、白ご飯でなく混ぜご飯、汁物はスープ系）

小山氏（美作スポ）

- ・昨年度は1回（福祉中心）しかできなかったというのが大きな課題。
- ・健康寿命の延伸は心と体の両面が健康でなければならない。
- ・今年度は健康寿命の延伸中心で3回の授業を行いたい。
- ・テーマに沿って健康寿命の延伸させるためには様々な視点（介護・看護・福祉）から見て行いたい。

久保氏（ドローン）

- ・家政科だけでなく、普通科もふるさと意識が上がれば良い。一緒に全校生徒で取り組んでもらいたい。
- ・ルーブリック評価はとても良い。
- ・防災は地域の高校生の取組が大きい。東日本大震災の際は日頃の取組が大事だと感じた。合同防災訓練にドローンの活用をしていただきたい。

武田氏（山崎高校）

- ・山崎には「山崎断層」があり、山崎は直下型地震の危険にさらされており集中豪雨の災害に遭いやすい大きな谷もある。本校も地元の自治会の皆さんと協力して防災・減災に取り組んでいる。

- ・毎年テーマを決めて11月に地域と防災訓練をしている。防災食についてや非常時にどんな物資があればいいのか、小さい子供たちを災害から救うためにはどうしたらいいのか、ハンドブックのようなものにまとめて自治会に配布したい。安全安心な町づくりをする際に連携をさせていただきたい。

神田氏（県教委）

- ・令和4年度の入学生から新学習要領が実施される。新学習指導要領というのは、資質能力という学習評価の見方をする。今まで知識・技能が大きくなっていったが、それ以外のところを見ていくことが大事。（ルーブリック評価など）
- ・主体的な深い学びは学校だけでなく、皆様方のご協力が大切。

田和氏（IDEC）

- ・特産品を使った商品開発で作ったトマトジャムがフードセレクションで金賞を受賞したという嬉しいニュースがあった。
- ・商品開発の中で生徒の皆さんと一緒にやらせて頂く中で、斬新な発想、高校生の視点で刺激になる部分がある。
- ・ただ作るだけではなくて、買っていただいておいしかったと言って満足してもらえような商品化をして、喜びを感じてもらえたら。

井上氏（自治会）

- ・佐用町の弱みというのがあるが、逆転の発想で河川災害は強みになっていると思う。
- ・災害については「災害後」「災害と災害の間」のことについて考えていかなければならないのでは。
- ・自治会と地域と連携してもっともっと取り組んでほしい。昨年大変苦勞して取り組まれたようだが、地域にはあまり浸透していない。
- ・佐用高校のブランド化を目指して、卒業しても定着してくれることが一つの期待。
- ・佐用町内にある企業の中に定着して佐用町の発展につながるような取り組みを遠慮せずにやってもいいのではないかな。

庵途氏（町長）

- ・高校としての取組なので、色々期待することもあるが1年間これだけやるわけではないので、限度はあると思う。
- ・子どもの出生率も低く、クラス数も減っていて、高校もかなり定員割れをしている。
- ・少ない人数の中で教育を通じて地域のこれからを担う、これからを支えていく人材になってほしい。
- ・プロフェッショナルとして取組を通して考え方や意欲を持っていくことも必要だと思う。
- ・地域との連携等期待したい。
- ・いろんな形で活動に対して十分に関わっていただいた中で、職員も必要なことを勉強しながらぜひ協力させていただけたら。

④ 指導助言

永田氏（兵教大）

- ・生徒自身がルーブリック評価を作成しているということは、それによって主体的な学びになると思われる。
- ・ヒューマンサービスの年間指導計画について
 - 後半の資質能力と育てたい力を書く方がよい。
 - ヒューマンサービスならではの目標が薄く感じる。単なる主体性とコミュニケーションだけではないと思うので、もう少し深い記述が必要になってくると思う。
- ・3つの柱ごとに図式化しているのは分かりやすい。
 - カリキュラムを開発するにあたっては何をするのか、どんな活動をするのかというのが大事だが、高等学校の教育なので「資質能力」は、学習内容や活動によってどんな力をつけるのかというのが大事。それぞれ学年のところに付けた力を書いてあるが、それぞれの学年を通して最終的に付けた力は、「食に通じた佐用を支えるプロフェッショナル人材に必要な資質能力とは一体何なのか」ということを示したら。
- ・P.17 実施計画について、活動のみの記述で終わっている部分が散見される。活動を行うことによってどんな力をつけさせるかということも意識して授業・カリキュラムの実施をするとよいのでは。

作野氏（島根大）

- ・評価した点は多様な学校科目を設定したこと、普通科との連携の道筋をつけたこと、それから本来の組織体制（地域協働部や地域協働推進委員会）を設けたことは、学校をあげて取り組まれていることなので大変素晴らしいことだと思う。
- ・今後、更に期待する点は評価。規準の書き方は大変大事。逆算することは大変大事。どういう人材を育てるかそのためにはどうあってほしいかが規準になる。規準から実際に活動と照らし合わせて元ができることを検討していただきたい。
- ・カリキュラムマネジメントについてはとても大事。
 - 地域側が参画するためにどうしたらよいかというと、地域側の組織が受け入れできる体制を作らなければならない。
 - カリキュラムマネジメントのイメージに基づいて、家政の先生方だけでもワークショップして作り上げていくとよりカリキュラムマネジメントに繋がる。
- ・地域との協働においてのところについて
 - 地域との連携は学校が地域にアプローチするだけではダメで、地域側が受け入れ体制を作って待っているだけではダメで、両者を結びつける必要がある。コーディネーターやアドバイザーが必要。地域と共にある高校側がコンソーシアム、学校と共にある地域側のコンソーシアムのようなものが必要。実行の組織体制も受け入れておいて、個別にしていくのではなくてトータルで受け入れ体制を整えておくと、学校側も負担が軽減される。だが、町が直営で運営していくのは難しいので、一般社団法人などの外郭組織を作って（中間支援組織）そこに対して町がお金を出す。今年度が終わったらどうするか、再来年度を目指して進んでいかなければ遅くなる。

深化した点と今後さらに期待する点

1. 深化した点

- 1) 多様な学校設定科目の設置
- 2) 普通科との連携
- 3) 校内の組織体制整備(地域協働部, 推進委員会)

2. 今後さらに期待する点

- 1) 評価: ルーブリック等の見える化
- 2) カリキュラムマネジメント(p.21)
- 3) 地域側の組織的受け入れ体制

井上会長のご意見に賛同します！

「強み」と「弱み」は裏表ですので
少し表現を変えて頂いた方がよい
と思います。
表頭の表現を変えるべきです。

例: 高齢化→弱みか？

2 研究内容〈カリキュラム・マネジメント〉

カリキュラム・マネジメント表

【教育目標】		学び合い つながり合い 主体的に未来を拓く児童の育成 ～がぶく、わたくし、たくましく～												
【身に付けたい資質・能力】		言語能力（言語を用いて思考し、その思考した内容を的確に表現する） 情報活用能力（必要な情報を主体的に収集・判断・表現・発信する） 問題発見・解決能力（学習場面において、これまでに身に付けた知識・技能を活用し、課題を解決する） コミュニケーション力（正解のない課題や経験したことのない課題に取り組む）												
月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
学校行事	始業式 春の遠足			終業式	運動会 休校学習	読書発表会 校内マラソン大会	読書の日の大発表 読書発表会 読書発表会	読書の日の大発表 読書発表会 読書発表会	読書の日の大発表 読書発表会 読書発表会	読書の日の大発表 読書発表会 読書発表会	読書の日の大発表 読書発表会 読書発表会	読書の日の大発表 読書発表会 読書発表会	読書の日の大発表 読書発表会 読書発表会	
国語	この言葉、あなたならどう考える 「新編と意見を交換しよう」(2)	筆者の伝えたいことを読みとめよう 「動物たちが教えてくれる物語の中のくらし」 「動物のからだ」 「動物のからだ」 「動物のからだ」	読書問題について話し合おう 山で読む本について話し合おう 「動物のからだ」 「動物のからだ」 「動物のからだ」	動物のからだについて話し合おう 「動物のからだ」 「動物のからだ」 「動物のからだ」	動物のからだについて話し合おう 「動物のからだ」 「動物のからだ」 「動物のからだ」	動物のからだについて話し合おう 「動物のからだ」 「動物のからだ」 「動物のからだ」	動物のからだについて話し合おう 「動物のからだ」 「動物のからだ」 「動物のからだ」	動物のからだについて話し合おう 「動物のからだ」 「動物のからだ」 「動物のからだ」	動物のからだについて話し合おう 「動物のからだ」 「動物のからだ」 「動物のからだ」	動物のからだについて話し合おう 「動物のからだ」 「動物のからだ」 「動物のからだ」	動物のからだについて話し合おう 「動物のからだ」 「動物のからだ」 「動物のからだ」	動物のからだについて話し合おう 「動物のからだ」 「動物のからだ」 「動物のからだ」	動物のからだについて話し合おう 「動物のからだ」 「動物のからだ」 「動物のからだ」	動物のからだについて話し合おう 「動物のからだ」 「動物のからだ」 「動物のからだ」
算数	算数の準備を 「算数の準備を」	算数の準備を 「算数の準備を」	算数の準備を 「算数の準備を」	算数の準備を 「算数の準備を」	算数の準備を 「算数の準備を」	算数の準備を 「算数の準備を」	算数の準備を 「算数の準備を」	算数の準備を 「算数の準備を」	算数の準備を 「算数の準備を」	算数の準備を 「算数の準備を」	算数の準備を 「算数の準備を」	算数の準備を 「算数の準備を」	算数の準備を 「算数の準備を」	算数の準備を 「算数の準備を」
理科	天気の変化 「天気の変化」	天気の変化 「天気の変化」	天気の変化 「天気の変化」	天気の変化 「天気の変化」	天気の変化 「天気の変化」	天気の変化 「天気の変化」	天気の変化 「天気の変化」	天気の変化 「天気の変化」	天気の変化 「天気の変化」	天気の変化 「天気の変化」	天気の変化 「天気の変化」	天気の変化 「天気の変化」	天気の変化 「天気の変化」	天気の変化 「天気の変化」
総合	総合の準備を 「総合の準備を」	総合の準備を 「総合の準備を」	総合の準備を 「総合の準備を」	総合の準備を 「総合の準備を」	総合の準備を 「総合の準備を」	総合の準備を 「総合の準備を」	総合の準備を 「総合の準備を」	総合の準備を 「総合の準備を」	総合の準備を 「総合の準備を」	総合の準備を 「総合の準備を」	総合の準備を 「総合の準備を」	総合の準備を 「総合の準備を」	総合の準備を 「総合の準備を」	総合の準備を 「総合の準備を」
特別	特別の準備を 「特別の準備を」	特別の準備を 「特別の準備を」	特別の準備を 「特別の準備を」	特別の準備を 「特別の準備を」	特別の準備を 「特別の準備を」	特別の準備を 「特別の準備を」	特別の準備を 「特別の準備を」	特別の準備を 「特別の準備を」	特別の準備を 「特別の準備を」	特別の準備を 「特別の準備を」	特別の準備を 「特別の準備を」	特別の準備を 「特別の準備を」	特別の準備を 「特別の準備を」	特別の準備を 「特別の準備を」

「書くこと」

付けたい力
(文章の種類)

令和3年度 兵庫県立佐用高等学校 第2回コンソーシアム委員会

1 日 時 令和3年10月20日(水) 14:30~15:30

2 場 所 兵庫県立佐用高等学校 会議室

3 出席者

(1) コンソーシアム委員

庵途典章氏(佐用町長)

井上洋文氏(佐用町自治会連合会長)

西川典男氏(佐用町教育委員会教育課 教育推進室長)

田和久典氏(IDEC株式会社グリーンソリューション事業部長)

松田圭介氏(ナニワフード株式会社)

水野博氏(日本調理製菓専門学校 校長)

久保正彦氏(一般社団法人 ドローン減災士協会 代表理事)

武田由哉氏(兵庫県立山崎高等学校 校長)

神田貴司氏(兵庫県教育委員会高校教育課 主任指導主事)

永田智子氏(兵庫教育大学 教授)

作野広和氏(島根大学 教育学部教授) ※リモート参加

(2) 佐用町 地域協働学習支援員 服部憲靖氏(佐用町企画防災課)

(3) 佐用高等学校 西坂美樹(校長)、上田貴哉(教頭)、岩崎由香子(教諭)、小寺由夏(教諭)、岡祐依(教諭)、多々良里奈(教諭)、高橋智美(臨時講師)、琴川加代子(臨時講師)、中田真佑(臨時実習助手)

4 次 第

(1) 資料確認

(2) 開会

① 開会のことば

②-1 校長(佐用高校 西坂校長)

- ・コロナ禍で、取組の3本柱の特産品を使った地域活性化・健康寿命の延伸・災害に強い町づくりの学びを止めないように工夫しながら実践をしてきた。
- ・感染拡大が収まりつつあるが先の読めない状況なので、それに負けないように今後も本事業を直実に一歩ずつ進めていきたい。

②-2 委員代表挨拶(佐用町 庵途町長)

- ・佐用高校で取り組んでいただいている事業は、コロナによって計画通りには達成できなかったということだが、地域社会としても健康づくりなど非常に大切な課題が入っていると思う。生徒の皆さんに十分に關心を持って取り組んでいただくことが将来に繋がる。
- ・これから感染拡大しないかどうかは分からないが、3回目のワクチン接種計画も行っている。今現在計画している事業や、さらにこれまでの遅れを取り戻せるようにこれ以上の活動にも取り組んでいただければと思う。

(3) 出席者紹介

(4) 司会選出

(5) 議事

- ① 令和3年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業
(プロフェッショナル型)」経過報告について
- ② 地域協働に関する生徒アンケートについて
- ③ 今後の事業展開について
- ④ 意見交換

水野氏 (みかしほ)

- ・ 1回目は災害時の食事ということで災害が起こった時にすぐに食べられる缶詰の依頼だった。ある程度災害が復旧してきた時に簡単な加熱調理で少し温かい味の濃いものを食べることが必要ではないかというので、アルミホイルにα米を包んで親子丼を作った。
- ・ 2回目の講習では高齢者向けの集団調理を行った。冷めて食べるという条件もいる。集団調理では大釜を使う面白さがある。集団調理は衛生管理が一番なので、おいしい以上に衛生をとということで勉強していただいた。

武田氏 (山崎高校)

- ・ 山崎高校の生活総合科という家政科の学科があり、そこが中心になって地域と連携しながら防災活動あるいは災害時の非常食についてこれまで研究してきて、情報提供もさせていただいている。
- ・ コロナウイルスが感染拡大している中で、山崎高校でも12月に地域と連携した防災活動を計画しているが、どこまでできるか見えていない。特に山崎断層があり、近年地球温暖化との関連もあるかもしれないが、気象災害が山間部で発生している。いざというときに高校生が中心となり、地域防災に役立つことができるかもしれないと考えている。

神田氏 (県教委)

- ・ 令和4年度から新学習指導要領が実施される。新しい学習指導要領に変わっていく中で、キーワードとして指導と評価の一体化が出てくる。佐用高校からの報告で、3本柱の中にある身につけたい力という説明があったが、実際この内容をやってどうだったかというのも大事になっていく。
- ・ 身につけたい力が身につけていないのであれば、今度工夫をどうすればいいのかという、指導したものを評価して指導していくというPDCAサイクルを回す必要がある。

松田氏 (ナニワフード)

- ・ 今年は昨年の反省を踏まえて、早めに形にできるような流れを作り、商品化に対しての指導というのができたと自負している。
- ・ 時間がない中で、どういう言葉で伝えたらちゃんと伝わるかというのは考えながら喋っているが、指導する方が経験不足な部分もあるのでどこまでちゃんと伝わっているか定かではない。出来上がったものを見ていただいて、非常に美味しいものが出来上がっているので、それを評価していただけたら、生徒たちも報われると思う。また来年最終年度に向かって、会議を重ねて、きちんとした製品が作れるように指導をしていく。

田和氏 (IDEC)

- ・3つの柱それぞれの活動の中で、体験をするカリキュラムが多く、この状況の中でこれだけの体験を生徒の皆さんが行うというのは非常に素晴らしい。
- ・ナニワフードさんと一緒に、特産品を使った商品開発で担当させていただいている。レシピが完成して、11月の販売にむけてラストスパートという会議になっている。
- ・今までの取組の状況をずっと見ていると、非常に生徒の皆さんは真面目に一生懸命カリキュラムに取り組んでいる。私どもが話をして知識を身につけていただく以上に、自分たちで学んで何か考える姿勢がすごく感じられるカリキュラムだと感じている。

井上氏 (自治会)

- ・高校の卒業後地元で貢献したいというアンケートは家政科が普通科よりも多いということだ。これは職場体験等をして、生きる力や働くことの意義や楽しみを実感できた生徒が多くいたのだと思う。
- ・現場でやることによって最初は不安があってもやっていくことによって自信がつくことをアンケートが表している。自治会としても色々な行事が年間あるが高校生などは地域に出てくるのが難しいと考えてきた。自治会としても生徒たちとこの地域の行事や伝統と一緒に頑張っていけば、生徒も生きる力や楽しみを実感していただけるのではないかと感じた。

久保氏 (ドローン)

- ・食や防災を中心にいろんな面で調整役のような形で関わらせていただいている。生徒達と一緒に授業することも多いが、本当に一生懸命に吸収しようとしている。そして素直に指導者の方の言うことを聞いて素直に受け取るので、発展、向上、育成されているように感じる。
- ・アンケートの結果を見ると居住地は町外の生徒が多い。その中で佐用町に魅力を感じ、特産物を知っている子が多い。これは普通科よりも家政科の方が多いのは、家政科で授業をしているからだと思う。
- ・地域貢献したいという意見もあった。残念なのは地元で働きたいというのが少ないこと。

庵途氏 (町長)

- ・生徒の考え方・意識がデータの形で出てきていて、佐用高校が地域と一体になって活動している学校であるという表れだと思い、嬉しい。
- ・家政科の学生の居住地で佐用町内が14%になっている。学区が広がって全体の生徒数が減少している中で、佐用高校に来てこんな勉強・生活をしたという佐用高校の魅力を高めていくことが学校において大切だということを改めて感じている。

⑤ 指導助言

永田氏 (兵教大)

- ・学習指導要領が変わっていく中で指導と評価の一体化や何を指導したかも大切だが、どんな力が付いたのかということの評価していくことが大切になってくる。これまでは何を教えるか、何をさせるかということが重視されてきたが、どんな資質能力が育成できたかが求められる時代になってきた。

- ・3本柱の左側に付けたい力が学年ごとに書かれているが、資質能力を評価するためには、付けたい力を計るための資料を残すこと、分析することが大切になる。付けたい力が本当についたかどうかを計る1つとして、生徒たちの書いたアンケートやレポートが重要な根拠資料になる。学びの記録をきちんと残しておくことが大切
- ・今後、ギガスクールで1人1台端末を持つようになると、紙だけではなく写真・動画を証拠に残していくことができる。
- ・自由記述から付けたい力（調査分析力、課題発見解決力、情報発信力、企画力）を見ることは難しい。見たい力を書かせるような項目を設定したり、書いたもので判断したりするのでなければ、力が見られるような実践の計画を立てると良い。どういう姿を見ることができれば、力が付いたのか見えるということまで想像して、事前にどう証拠を残すのか計画しておく、どんな力が付いたのか取組の成果を見ることができる。
- ・自由に書かせたら、想定していた以外の力も付いているということも有り得る。例えば探究力しか考えていなかったが、心の成長や認定力が付いたなど、想定外の力が付いたことが他の資料から見ることができれば、付けたい力を変更していくこともできる。

作野氏（島根大）

- ・学校の先生方は忙しくて資料を作ることが難しいが、佐用高校は初年度からしっかりと資料を作っているところが高く評価できる。
- ・良い点はスパイラルな向上を意識されていること。指導要領にも書いてあるように、生徒が学年を上がるにつれてスパイラルに向上をする。学校としても年度が経つにつれて成長している。
- ・フードデザイン、ヒューマンサービスなどの多様な学校設定科目を作り、総合的な探究の時間などの行動的なカリキュラムを作っていることも高く評価できる。
- ・生徒の声と地域を聞いていると、学校と地域が近づいていることは大きな成果。一方で、今後更に期待できることとして、前回言ったルーブリックなどの評価の見える化により、指導と評価の一体化の今後研究が進めば、評価という観点が重要な論点になる。
- ・学校の先生方が他の教科、領域（カリキュラム）とどう関係しているのか。家政科ではやっているのかもしれないが、普通科と連携しなければいけない。学科が違うからではなく、高校としてカリキュラムを考えていただくと良い。
- ・学校に地域が参画するというステップ1。学校と地域が連携するというステップ2。おそらく佐用高校もステップ2である。目指すのは本当の意味での協働。地域側が学校に対して何を求めているのか、学校と一体になってやっていくことが大切。県立高校というのは難しさがある。佐用地域では佐用中学校などとは連携をしているかもしれないが、教育委員会できちんと考えていただかなければならない。地域と学校が同じ目標に向かっている、地域と学校が相互補完できることが必要。お互いがお互いの学び場であり、地域から学校を見れば学校教育を受ける場、学校から地域を見ると社会教育の一端を担って人材の育成を行うという考え方がステップ4である。

評価できる点と今後さらに期待する点

1. 評価できる点

- 1) **スパイラル**な向上 1年→2年→3年
- 2) **多様な教科・領域**(学校設定科目)の組み込み
- 3) **地域と密着**(連携・協働) 生徒の声・地域の声

2. 今後さらに期待する点

- 1) **指導と評価**: **ルーブリック**等の見える化(前回提示)
- 2) **カリキュラムマネジメント**(前回提示)
- 3) 「主体的」「対話的」な学び→「**深い学び**」の重要性

学習指導要領改訂の方向性

新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実

学びを人生や社会に生かそうとする
学びに向かう力・人間性等の涵養

生きて働く知識・技能の習得

未知の状況にも対応できる
思考力・判断力・表現力等の育成

何ができるようになるか

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、
社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む

「社会に開かれた教育課程」の実現

各学校における「カリキュラム・マネジメント」の実現

何を学ぶか

新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた
教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

小学校の外国語教育の教科化、高校の新科目「公共（仮称）」の新設など

各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容を構造的に示す

学習内容の削減は行わない※

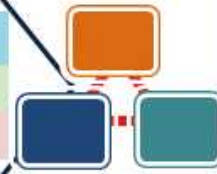
どのように学ぶか

主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」）の視点からの学習過程の改善

生きて働く知識・技能の習得など、新しい時代に求められる資質・能力を育成

知識の量を削減せず、質の高い理解を図るための学習過程の質的改善

主体的な学び
対話的な学び
深い学び



※高校教育については、些末な事実的知識の暗記が大学入学者選抜で問われることが課題になっており、そうした点を克服するため、重要用語の整理等を含めた高大接続改革等を進める。

令和3年度 兵庫県立佐用高等学校 第3回コンソーシアム委員会

1 日 時 令和4年2月5日(土) 11:30~12:30

2 場 所 さよう情報文化センター 会議室

3 出席者

(1) コンソーシアム委員

庵途典章氏(佐用町長)

井上洋文氏(佐用町自治会連合会長)

西川典男氏(佐用町教育委員会教育課 教育推進室長)

田和久典氏(IDEC株式会社グリーンソリューション事業部長)

水野博氏(日本調理製菓専門学校 校長)

小山和也氏(美作市スポーツ医療看護専門学校 事務局事務部長)

久保正彦氏(一般社団法人 ドローン減災士協会 代表理事)

武田由哉氏(兵庫県立山崎高等学校 校長)

井上珠郁氏(兵庫県教育委員会高校教育課 主任指導主事)

永田智子氏(兵庫教育大学 教授)

作野広和氏(島根大学 教育学部教授) ※リモート参加

(2) 佐用町 地域協働学習支援員 服部憲靖氏(佐用町企画防災課)

(3) 佐用高等学校 西坂美樹(校長)、上田貴哉(教頭)、岩崎由香子(教諭)、 小寺由夏(教諭)、岡祐依(教諭)、多々良里奈(教諭)、小谷美香子(教諭)、 高橋智美(臨時講師)、中田真佑(臨時実習助手)

4 次 第

(1) 資料確認

(2) 開会

① 開会のことば

②-1 校長(佐用高校 西坂校長)

- ・合同防災訓練は山崎高校の地域と連携した取組の資料を参考に、佐用高校バージョンで実施した。
- ・訪問サービスは、地域を特定した活動を考えていたが難しかったので直接個人にお願いして訪問した。
- ・昨年の発表の反省をして今年度は改革をしたが、佐用高校が最終的に目指しているところには、まだ到達できていない。

②-2 委員代表挨拶(佐用町 庵途町長)

- ・今後の高校のあり方をどう考えていくか、教育の立場だけではなく地域においても大きな課題。地域協働をきっかけにして、地域に出て地域を知り地域のために働く高い志を持った生徒を育てて欲しい。
- ・文科省の事業が地域を支えていく人材育成の方向性を示すと期待。三年間で終わるのでなく、佐用高校の教育の特色にして欲しい。

(3) 出席者紹介

(4) 司会選出

(5) 議事

- ① 令和3年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業
(プロフェッショナル型)」経過報告について
- ② アンケート比較について
- ③ 令和4年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業
(プロフェッショナル型)」研究開発事業計画について
- ④ 意見交換

水野氏 (みかしほ)

- ・災害時に温かいものを食べられるように、缶詰とアルミホイルを使って調理した。ご飯を水ではなく牛乳を入れて炊くと、不足しがちなカルシウムやたんぱく質も摂れる。
- ・高齢者向けのお弁当では、高齢者に不足する栄養素も摂れる献立にした。弁当は中身だけではなく、衛生や安心安全の方が大切。噛む力の弱さや味付けも考えた献立にした。
- ・カフェでの実習では、プレートランチについて勉強してもらった。メニューは姫路レンコンを使ったハンバーグを中心に、女性に喜ばれる野菜を活かした献立。食事やデザートだけでなく、ポップや接客についても勉強して楽しんでもらえた。
- ・みかしほ学園でも永田先生がおっしゃっていた「力の評価」を利用して、自分なりの評価をイベントの事前事後に取って就職活動に利用している。

小山様 (美作スポ)

- ・健康寿命の延伸のテーマをもとに、介護・福祉・医療の分野で研修。在校生にはない、高校生ならではの様々な気づきや意見を聞いたので、フィードバックしたい。高校生がどんなことを考えているか学校内でも共有したい。
- ・本校では、在校生が美作市の学生消防隊として40名ほど参加している。災害時の避難所では、高齢者や基礎疾患を持っている方に対して、医療の知識を持った学生がケアをする。

武田様 (山崎高校)

- ・コロナの影響で地域と一緒に活動することが難しいが、毎年メインテーマを作り、防災に関して取り組んでいる。
- ・「地域の皆さんの安全安心」という防災の観点で、私たちは日本人なので日本人をイメージするが、宍粟市の中には外国人の方もたくさんいる。日本語が堪能ではない場合や、イスラムの方だと食べ物に困る。田舎だが、災害時に人種や民族を超えて考えるべき。

井上様 (県教委)

- (1)商品開発では「なぜ行うのか」や「こうなったらどうなるか」という過程が発表の中で見えにくい。
- (2)商品開発はKJ法で決まったとあったが、今後の発表では企業や地域がどう関わっているかが見えると面白い。例えば、福祉は教師が現場でどういう意味づけでやっているか見たい。過程が発表の中にあれば、段取りと結果が見える。文科省がこの事業のモデル

にと言っているのです、他の学校でどうやったら生徒が変わるかが分かる発表が必要。

(3)キャリア教育の中では、生徒がどう変わったか指標を示すことが望まれる。

○今回の地域協働も「生徒がどのように変わっているか」が目に見え、「数字が変わっているか」を客観的に示すと取り組みやすい。

田和氏 (IDEC)

- ・SDGsの活動につながっている。高校生が勉強でやっていることが、地域貢献になっている。企業が必死になって取り組んでいる活動を高校生がやっていることに意義がある。
- ・商品開発ではトマトカレーとトマトソースを作って商品化した。課題は価格設定や材料選定などがある。毎年商品化できるかと考えながら行っている。来年は地域の特産品としてインターネットでバズる商品を作りたい。

井上氏 (自治会)

- ・訪問サービスについて喜ばれたという意見があった。
- ・高校生の皆さんがやっていただいたことに関して認識を新たにしなければならない。
- ・防災訓練に参加させていただいた。紙での皿作りやマスク作りを体験した。日頃からおざなりにしていることを高校生の皆さんが親身になって教えていただいた。
- ・防災は集落でも考えていかなければならない。企画から参加させていただいて、地域全体に訓練の参加を呼び掛けても良かった。とても勉強になった。

久保氏 (ドローン)

- ・ドローンが避難放送をする時に、高校生が自分達できちんと原稿を考えて放送していたことに驚いた。練習の時よりも、本番が一番良かった。
- ・650人の訓練だったが、佐用町内からもっと人を呼んでもいい訓練だと思う。
- ・江川地域づくり協議会でセンター長をしているが、佐用町内で2番目に高齢化率が高く、50.5%であり、地域づくりでキーになる人も高齢化してきている。
- ・佐用高校の同窓生からの反響も返ってきている。

⑤ 指導助言

永田氏 (兵教大)

- ・(1)家政科の先生方が尽力した姿が資料から見えてこない。モデル化して全国の高校で行う場合、他の学校の先生は何をすればこの状態ができるのかを知りたい。「こんな感じではなければならない」という努力や、「ここはやってはいけない」という生徒の活動だけではなく、それに至るまでの先生の支援や活動の肝の部分、情報として示して欲しい。
- ・(2)評価の話。例えば「付きたい力」という表がある。今後は、各科目や活動内容によって、「この科目ではこんな力が付く」と細分化したら良い。
- ・生徒の感想は面白い。感想がストーリー的でプロセスを含めて書かれている「ナラティブ」という手法で、やってきたこととその時感じたことを物語風に振り返っている。全員分を集めて、付きたい力に即して分類すると上手く使える。
- ・最初に「こういう力を見る」という見方もあるが、事実から理論を作り出す「グラウンデッドアプローチ」という方法もある。この取組がこんな力を育てるという理論を作ることでもできる。自由記述は強力なツールなので、感想を随時取って分析することが大切。

作野氏（島根大）

- ・他校で生徒が主体的・意欲的に実践をやっているのはあまりなく、評価などの観点も十分意識されている。
- ・生徒の学びと育ちに繋がっている。評価事項を持って臨んでいる非常に良いPDCAサイクル。
- ・課題(1)「提言」はよく使われるが、現状から後退する表現。佐用高校はもっと上を目指し、地域の役割の一部を担うことが必要。佐用高校がないと困ると言われるほどに地域の一部を成すべき。
- ・課題(2)今年度はカリキュラムマネジメントについて、学科間の繋がりを意識できた。特に普通科は乖離しているので、学校全体で探究の時間や学校設定科目を備える。
 - 大人は古い価値観があるので変わりにくい。文科省の方針や大学でも「何を学ぶか」ではなく、「どう学ぶか」「何を目指して高等教育機関に進学するか」が問われる。専門学科では意識しやすいが、普通科は意識しないと学ぶ意味が薄まる。この授業をきっかけに切り込んで欲しい。
- ・「シンク・グローバリー アクト・ローカリー」の考え方。
 - ローカルな地域を学ぶには、日本全国だけでなく世界と直結して、世界が1つのシステムで連動していることも学ぶことが必要。佐用のような中山間地域では、身近な地域のことは学びやすいが、全世界と繋がっていることも学んで欲しい。
 - 大学の中や地域では、ジェンダーフリーやハラスメントの問題がマイナスに影響している。価値観の固定化、あるいは古い価値観でいると、ハラスメントをしたつもりでなくてもハラスメントになる。この学習が思考の柔軟性にどう切り込んでいくかが大切。生徒が大人たちを変えていくと、全体が良くなる。佐用においては佐用高校生なくしては、地域が成り立たないとなる。

講評

■成果

- ・2年間で十分な取り組み、成果、評価 →PDCAサイクルを確実に進めている
→生徒の「学び」と「育ち」に好影響

■課題

1) 「提言」について

「提言」=言いつ放し、聞きっぱなし

2) 「カリキュラム・マネジメント」について

教科との連携/学科間の連携（本年度は進歩あり）

佐用高校をどうするか
佐用町をどうするか
日本や世界をどうするか

↓
大人側の視野が問われる

2) Think Globally、Act Locallyについて

世界的視野に立つ：グローバル社会、ジェンダー、レジリエンス

(2) 運営指導委員会実施報告

令和3年度 兵庫県立佐用高等学校 第1回運営指導委員会

1 日 時 令和3年8月5日(木) 14:00～15:30

2 場 所 兵庫県立佐用高等学校 会議室

3 出席者

(1) 運営指導委員

浅野博之氏(佐用町教育長)

岸田恵津氏(兵庫教育大学 教授)

江見秀樹氏(佐用町企画防災課 課長)

田和久典氏(IDEA株式会社グリーンソリューション事業部長)

波部新氏(兵庫県教育委員会高校教育課 主任指導主事)

(2) 地域協働学習支援員 服部憲靖氏(佐用町企画防災課)

地域協働アドバイザー 久保正彦氏

(3) 佐用高等学校 西坂美樹(校長)、上田貴哉(教頭)、岩崎由香子(教諭)、小寺由夏(教諭)、岡祐依(教諭)、多々良里奈(教諭)、高橋智美(臨時講師)、中田真佑(臨時実習助手)

4 次 第

(1) 資料確認

(2) 開会

① 開会のことば

②-1 校長挨拶(佐用高校 西坂校長)

- ・本事業については、昨年度新型コロナ感染拡大でなかなかスタートを切れなかった。予定していた実践活動もかなりの中止や制限を受けたが、知恵を出しながら「with コロナ」新しい生活様式の中でもできる新しい取組を考えて実践してきた。2月6日には研究発表大会を佐用情報センターで実施して、皆様に来ていただき貴重なご意見をいただいた。
- ・新型コロナウイルスに負けないで本事業を着実に一步ずつ進めていきたい。本日は昨年度の取組内容や実践などを振り返り、ご意見ご感想をいただき、これからの取組に活かしていきたい。

②-2 委員代表挨拶(佐用町教育委員会 浅野教育長)

- ・佐用高校家政科を中心に、地域に根ざした魅力ある学校作りを頑張っている。
- ・県では「高校教育あり方検討委員会」が進んでいる。学べる子は学びたいところに行けるようになっていると思うが、その反面で学校格差が出てきた。地元に残してほしいというのが西播磨各地の教育長の意見。
- ・佐用高校がさらに魅力ある高校になるように取り組んでいただいて、地元の子や他の市町からもたくさん来てくれることを願っている。

(3) 出席者紹介

(4) 司会選出

(5) 議事

- ① 令和3年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業
(プロフェッショナル型)」研究開発事業計画について
- ② 事業進捗状況について
- ③ 意見交換

波部氏 (県教委)

- ・来年度から始まる新学習指導要領に向けて、今後新たにどのような教育が求められているのかということ各学校に説明している中で一番今意識しているのが、何ができるようになるか以前に、どうやって学んでいくかというプロセス。実施をした前と後のプロセスで、変わったということを生徒に実感させることが深い学びに繋がる。
- ・研究の核となるヒューマンサービスという学校設定科目の中で、気になったのが、地元に残りたいという生徒の数が去年も高くなかったというところ。外を見て自分の故郷のよさが分かると思うので、この科目の中で日本の中、世界の中の佐用の位置が分かって、生徒に意味を持って考えさせる機会を作り、私が住む地域がこんなにすごいということを感じると、もっと地域にいたいという思いも増えてくるのではないかと。

田和氏 (IDEC)

- ・今年には体験にプラスして、生徒自身がその進捗を評価するルーブリック評価を導入されているということで、やってみる前とやってみた後でどうだったのか評価できるという部分がすごくいいと思った。
- ・コンソーシアム委員会のメンバーにも会社として参画させていただいているが、参画する側のメンバーとしては体験する機会、学校の授業の中ではなかなかできないことを企業が参画することで体験できるという部分に焦点を当てていきたい。

浅野氏 (教育長)

- ・小中学校で学習したことが高校になって、さらに高度な体験や中身で取り組んでいただけるという連携をと思う。中高連携を今もさせていただいているが、小学校や中学校での取組もまた視野に入れて取り組んでいただけたらと思う。
- ・ヒューマンサービスも実際に体験をして、給食ボランティアでも感想がハガキで返ってきている。給食ボランティアをすることによって高齢者の方と心と心が繋がったというのは大事だと思う。心の繋がりがあってこそ佐用町に貢献しようという気が起きてくるのではないかとと思うので、連携を踏まえた取組をさせていただけたらと思う。

④ 指導助言

岸田先生 (兵教大)

- ・高校の専門学科のことをこの機会に勉強させていただいている。今回拝見させていただき、すごく充実してきている印象を持った。3つの研究テーマを立てていたが、それぞれが別々に縦に動いているのではなく、横断的になっている印象強く持った。おそらくヒューマンサービスの位置づけが良い。カリキュラムマネジメントが意識されていることもよく分かる。今後3年生で仕上げる資質能力というものに期待が持てる。

令和3年度 兵庫県立佐用高等学校 第2回運営指導委員会

1 日 時 令和3年12月15日(水) 14:00～15:30

2 場 所 兵庫県立佐用高等学校 会議室

3 出席者

(1) 運営指導委員

浅野博之氏(佐用町教育長)

岸田恵津氏(兵庫教育大学 教授) ※リモート参加

森田和樹氏(佐用町企画防災課 まちづくり企画室長)

田和久典氏(IDECC株式会社グリーンソリューション事業部長)

井上珠郁氏(兵庫県教育委員会高校教育課 主任指導主事)

(2) 地域協働学習支援員 服部憲靖氏(佐用町企画防災課)

地域協働アドバイザー 久保正彦氏

(3) 佐用高等学校 西坂美樹(校長)、上田貴哉(教頭)、岩崎由香子(教諭)、 小寺由夏(教諭)、岡祐依(教諭)、多々良里奈(教諭)、高橋智美(臨時講師)、 琴川加代子(臨時講師)、中田真佑(臨時実習助手)

4 次 第

(1) 資料確認

(2) 開会

① 開会のことば

②-1 校長挨拶(佐用高校 西坂校長)

- ・昨年度と今年の4～5月は新型コロナウイルスで計画通り活動が進まず停滞したが、5月下旬からは少しずつ活動できるようになり、夏休み中も出来る範囲内で工夫して行った。
- ・計画の変更や縮小で予定していた通りにはできとは言えないが、去年でできなかったことも8月以降で新たに組み組めた。

②-2 委員代表挨拶(佐用町教育委員会 浅野教育長)

- ・佐用町では感染が落ち着いて、高齢者を対象に敬老の日のイベントを開いた。久しぶりに会えたことで、町民の皆さんの嬉しそうな顔が見えた。
- ・佐用高校の家政科の皆さんの活躍を、新聞記事で見てよく頑張っていると思う。佐用町の魅力を発信していただいで感謝。

(3) 出席者紹介

(4) 議事

- ① 令和3年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(プロフェッショナル型)」経過報告について
- ② 地域協働に関する生徒アンケートについて
- ③ 今後の事業展開について
- ④ 意見交換

井上氏（県教委）

- ・研究自体が学校の新しいカリキュラム開発をすること。「見える化」されて他の学校でも活かせることが大事。文部科学省の研究は学校・地域で行った後が広がっていかないことが課題。
- ・佐用高校の取組に関しても、カリキュラム構成から生徒の変容が分かり、他の学校でも出来るような形を取らなければならない。
- ・自己肯定感の上がり方が具体的な数値で示されることも必要。アンケートやルーブリック評価も、教員側の評価が重要。生徒の変容を見ていくために、教員の評価を取ることも大事。
- ・防災訓練などの大きな取組は、学校全体でのカリキュラムマネジメントに、普通科の生徒や農業科学科の生徒との連携も関わってくる必要がある。
- ・最後の年度である三年目を迎えるにあたり、色々な取組が「どんな力をつけるために行い、どうだったのか」が整理されて「見える化」した形で、全国の皆さんに発信してほしい。

田和氏（IDEC）

- ・去年とは違い、今年は想定していたカリキュラム通りに大体進行した。去年できなかった体験を数多くできたことに喜びを感じる。
- ・学ぶ中で机では分からないことが、体験だと実際にお客様やお年寄りと接して初めて分かる感情的な部分がある。

浅野氏（教育長）

- ・佐用町の資源を使った取組を通して、生徒たちが色々な力をつけている。
- ・体験を通してコミュニケーション力が身につく。コロナが収まり、体験できることは喜ばしい。
- ・単にお弁当を配布するだけではなく、はがきを通して心のつながりを求められたのは良い。触れ合えなくても心の繋がりが出来たという大切なことを学んだと思う。
- ・自分たちの取り組みがどう反応を得たか、評価されているか知ることによって次への意欲が高まり、課題も見えてくる。行ったことと評価は大事。アンケートなどで取り組んでいただきたい。
- ・佐用高校は地元の子が少ないのは少子化で仕方ないが、佐用の高校生が色々な場所で活躍してくれるとPRになる。佐用高校の取り組みを地域にもっと発信していただけたら。

⑤ 指導助言

岸田氏（兵教大）

- ・前回から格段の進歩・推進力が見えてとても興味深かった。大変な状況下でしっかりと取り組まれたことが分かった。
- ・今後の課題は、教員がアンケートやポートフォリオの分析をすることだと理解されている。
- ・カリキュラム開発は地域協働事業でもあり、食育でもある。
- ・フードデザインの学習指導要領に「食育と食育推進活動を扱いましょう」とある。食育の意義や食育を推進することの重要性を理解し、家庭や地域における食育推進活動のプロモーターになることも、「どんな力がついたか」に加えてもよい。
- ・食育を推進していく重要性のほかり方も課題になるが、ポートフォリオの分析から見えることを期待している。
- ・専門学科の生き残りをかけて、地域貢献は着眼点であり、重要なポイントである。佐用高校だから出来たのではなくて他の学校でも出来るために、ポイントが見えることが必要。

令和3年度 兵庫県立佐用高等学校 第3回運営指導委員会

1 日 時 令和4年2月22日(木) 16:00～17:00

2 場 所 兵庫県立佐用高等学校 会議室

3 出席者

(1) 運営指導委員

浅野博之氏(佐用町教育長)

岸田恵津氏(兵庫教育大学 教授) ※リモート参加

森田和樹氏(佐用町企画防災課 まちづくり企画室長)

田和久典氏(IDECC株式会社グリーンソリューション事業部長) ※リモート参加

神田貴司氏(兵庫県教育委員会高校教育課 主任指導主事)

(2) 地域協働アドバイザー 久保正彦氏

(3) 佐用高等学校 西坂美樹(校長)、上田貴哉(教頭)、岩崎由香子(教諭)、 小寺由夏(教諭)、岡祐依(教諭)、多々良里奈(教諭)、高橋智美(臨時講師)、 琴川加代子(時間講師)、中田真佑(臨時実習助手)

4 次 第

(1) 資料確認

(2) 開会

① 開会のことば

②-1 校長挨拶(佐用高校 西坂校長)

- ・今年コンソーシアム委員の皆様にご協力いただき、ヒューマンサービスでの高齢者訪問、合同防災訓練、商品開発など充実した活動ができた。
- ・生徒につけたい力を明確化して、「提言」という言葉に留まらずに、佐用高校が役割を担って活動すること。カリキュラムマネジメントでは家政科に留まらず、農業科学科・普通科でも地域との協働活動が派生すること。などの永田先生や作野先生からのご指摘・ご指導への取り組みも進めている。
- ・来年度に向けてより一層充実した取り組みになるように努める。

②-2 委員代表挨拶(佐用町教育委員会 浅野教育長)

- ・佐用町では1月からコロナの感染が増えて、2月には小学校閉鎖や保育園のクラス閉鎖をして、クラスターは起きずに落ち着いてきている。
- ・2月5日の発表会では、色々な制限がある中で生徒さんが頑張ってくれたことを聞いた。新たな取組や今までの活動を更に広げて進化したことを聞いて、嬉しかった。
- ・最終年度の来年は意見を頂きながら更にパワーアップしたい。

(3) 出席者紹介

(4) 議事

- ① 令和3年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(プロフェッショナル型)」経過報告について

② 令和4年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業
(プロフェッショナル型)」研究開発事業計画について

③ 意見交換

神田氏 (県教委)

- ・今年度コンソーシアム委員の協力もあり、たくさんのことに取組んでいただき感謝。
- ・「指導と評価の一体化」という言葉もあるが、この事業はカリキュラム開発が目的。目標に向かってカリキュラムを作成する。前回のコンソーシアム委員会で作野先生や永田先生から目指す力について話があった。3本柱の「〇〇力」がついているか評価して欲しい。
- ・評価には定性的と定量的の2つがある。感覚ではなく客観的な評価をして欲しい。
- ・力について最終年度で評価して、できていないところはできるように修正して欲しい。
- ・PDCA サイクルを回しながら佐用高校にとって更に良いものを次年度で行って欲しい。
- ・3年で終わりではない。発表会で作野先生からもあったように、地域への還元が発展して、地域の中で当たり前佐用高校が行う形がベスト。この活動が佐用高校にとってより良いものとなり、さらに地域の活性化に繋がられることを願う。

田和氏 (IDEC)

- ・商品開発したものをイベントで販売して、生徒の力もついたと思う。
- ・その先をどうするか考えると、地域の宿泊施設と連携して開発した商品を使った料理をお客さんに食べてもらう体験ができると良い。開発したものを買っていただいて嬉しい、それを使った料理を食べてもらって更に嬉しいという体験ができると、モチベーションも上がる。
- ・様々なことへのモチベーションにも繋がり、生徒の力も更に増幅されるのでは。

浅野氏 (教育長)

- ・教育は人づくり。活動を通して地域を支える人材を育成していくのが狙い。
- ・地域に何が必要か、どんな課題をどう解決していくか、見通しを持って行うことが大事。
- ・取組を通して、積極的発言・企画力向上・コミュニケーション能力向上などの社会を切り拓く力をつけて欲しい。
- ・達成感や「私は役に立っている」という気持ちを生徒に持たせることが、持続力になり次のやる気に繋がると思うので、その評価も続けて欲しい。
- ・西播磨管内では不登校傾向の子供が増加しつつある。コミュニケーション能力があれば、子供たちを救えると思う。
- ・防災の教育は佐用にいるからできるのではなく、どこに行っても防災の意識が持てるような人間にならなければならない。
- ・旅行先などの知らない土地で孤立するのは怖い。その時に自分の命を守る行動が出来るようになると、定着に繋がっていくと思う。防災の意識を教育で高めながら身につければ良い。
- ・活性化だけではなく、佐用高校全体で3本柱の雰囲気浸透して欲しい。

④ 指導助言

岸田氏 (兵教大)

- ・生徒については色々と力がついていることが分かったが、教員の関わりを合わせて示すと良い。今後の他の所への一般化・発信という点では有用な情報。

5 令和3年度の成果と課題

①具体的成果

- 「佐用もち大豆コンテスト」で4名入賞
- 「全国高等学校家庭科技術検定」にて食物調理・被服製作(洋服)・被服製作(和服)・において1級取得で三冠王取得者増加
- 「色彩検定」受験者と取得者の増加
- 「文書デザイン検定」にて受験者と取得者の増加
- 「文書デザインコンテスト」にて1,480作品の中から審査員特別賞の受賞

②生徒の意識の変容 ※ 図1グラフ参照

生徒の意識調査を目的としてアンケートを実施した。家政科生徒の地域に対する意識の高さから本事業の成果として捉えることができる。

- ・佐用町内在住は、普通科生徒が一番多く約4割、次いで農業科学科で約3割、家政科が一番少なく15割である。家政科は本事業対象の2学年と1学年に限ると1割以下。
→ 地域と協働するにあたってはまず、佐用町について学ぶことが必要である。
- ・地域交流や貢献がしたいか、という質問では普通科が約6割、農業科学科が約8割なのに対して家政科は9割が肯定的である。
→ 本事業により従来よりも専門的な学びと地域との協働事業に深みがあることにより、意識が高い。

③考察と今後の課題

- ・教科や学年、学科を越えてのカリキュラム・マネジメント
→ 令和3年度は1学年が全体で地域活動を実践した。また、農業科学科は地域の活性化につなげる独自の「ビジネスコンテスト」を実施している。家政科の地域協働活動とのリンクを考え、学年や学科間交流のある事業を計画する。
- ・新型コロナウイルスの影響による新しい生活様式の中での地域交流、貢献活動の在り方
→ 「高校生訪問サービス」や「給食サービス」は地域の方々にとってかけがえのない交流事業であることが実証された。しかし、未だに新型コロナウイルスの影響はあることから、実際の訪問や交流のみならず、リモートでのコミュニケーションツールを確立することで、機会を増やす。
- ・成果物やアンケートの具現化と「指導と評価の一体化」
→ 今年度はそれぞれの取組の中で生徒のレポートやポートフォリオ、アンケートを多数実施した。これらの身に付いた力や評価をより反映させるためにルーブリックやパフォーマンス評価を活用した指導計画を立てる。
- ・国際的な視野に立ちグローバルな思考を身に付ける
→ 地域の日本語学校に留学中の生徒や隣接県との協働活動や情報交換の環境を作ることで、広い視野とグローバルな知識と技術の習得を目指す。

(1) アンケート結果 【図1】

家政科 (95名)	農業科学科 (109名)	普通科 (288名)
Q1.あなたの現在の居住地はどこか。		
<p>1佐用町 14% 2佐用町以外 86%</p>	<p>1佐用町 27% 2佐用町以外 73%</p>	<p>1佐用町 40% 2佐用町以外 60%</p>
Q3.佐用町の特産物を知っているか。		
<p>1はい 97% 2いいえ 3%</p>	<p>1はい 71% 2いいえ 29%</p>	<p>1はい 50% 2いいえ 50%</p>
Q4.高校生として地域に貢献できることをしたいか。		
<p>1とてもそう思う 10% 2そう思う 72% 3あまり思わない 17% 4全く思わない 1%</p>	<p>1とてもそう思う 15% 2そう思う 59% 3あまり思わない 24% 4全く思わない 2%</p>	<p>1とてもそう思う 8% 2そう思う 52% 3あまり思わない 32% 4全く思わない 8%</p>
Q5.学校の授業や行事で地域と交流したいか。		
<p>1とてもそう思う 15% 2そう思う 74% 3あまり思わない 10% 4全く思わない 1%</p>	<p>1とてもそう思う 24% 2そう思う 54% 3あまり思わない 21% 4全く思わない 1%</p>	<p>1とてもそう思う 9% 2そう思う 51% 3あまり思わない 31% 4全く思わない 9%</p>
Q6.学校の授業や行事で地域と交流することで達成感や満足感はあるか。		
<p>1とてもそう思う 19% 2そう思う 66% 3あまり思わない 12% 4全く思わない 3%</p>	<p>1とてもそう思う 22% 2そう思う 60% 3あまり思わない 15% 4全く思わない 3%</p>	<p>1とてもそう思う 12% 2そう思う 54% 3あまり思わない 27% 4全く思わない 7%</p>
Q7.高校卒業後、いずれは地元で働きたいと思うか。		
<p>1とてもそう思う 6% 2そう思う 35% 3あまり思わない 42% 4全く思わない 17%</p>	<p>1とてもそう思う 13% 2そう思う 39% 3あまり思わない 40% 4全く思わない 8%</p>	<p>1とてもそう思う 8% 2そう思う 30% 3あまり思わない 43% 4全く思わない 19%</p>

(2) 目標設定シート

ふりがな	ひょうごけんりつきやうこうとうがっこう	指定期間	令和2～4
学校名	兵庫県立佐用高等学校		

地域との協働による高等学校教育改革推進事業 目標設定シート (報告時)

1. 本構想において実現する成果目標の設定 (アウトカム)							
	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(年度)	
(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)							
地域をよくするために、地域課題の解決に関わりたいと思う生徒の割合						単位：％	
a	本事業対象生徒：		90	70	80	80(R4)	
	本事業対象生徒以外：	20	20	69	40	50	50(R4)
目標設定の考え方：佐用町の現状を学び、課題を明確にする方向性を見出す。							
(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)							
健康寿命を延ばす食生活の在り方を考え、提言した生徒の割合						単位：％	
a	本事業対象生徒：		30	65	80	80(R4)	
	本事業対象生徒以外：	0	0	0	0	0	
目標設定の考え方：佐用町の現状を学び、課題を明確にする方向性を見出す。							
(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)							
佐用町の防災行事等に参加した生徒の割合						単位：％	
a	本事業対象生徒：		100	100	100	100(R4)	
	本事業対象生徒以外：	30	30	30	40	50	50(R4)
目標設定の考え方：佐用町の現状を学び、課題を明確にする方向性を見出す。							
(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)							
家庭科技術検定(食物調理1級)取得生徒の割合						単位：％	
a	本事業対象生徒：		100	100	100	100(R4)	
	本事業対象生徒以外：	5	5	0	10	10	10(R4)
目標設定の考え方：知識と技術の定着度合いをはかる。							
(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)							
高校卒業後、いずれは地元で働きたいと希望する生徒の割合						単位：％	
b	本事業対象生徒：		43	60	70	70(R4)	
	本事業対象生徒以外：	50	50	38	60	70	70(R4)
目標設定の考え方：地元へ愛着を持ち、就業することを目標としている。							
(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)							
高校卒業後、地元へ貢献したいと思う生徒の割合						単位：％	
b	本事業対象生徒：		62	65	80	80(R4)	
	本事業対象生徒以外：	50	50	61	60	70	70(R4)
目標設定の考え方：学んだことを将来に生かしたいと思う指標をはかる。							
(その他本構想における取組の達成目標)							
地域交流や「高校生訪問サービス」等の体験的な学びに参加した生徒の割合						単位：％	
c	本事業対象生徒：		100	100	100	100(R4)	
	本事業対象生徒以外：	50	50	50	60	70	70(R4)
目標設定の考え方：学んだことを将来に生かしたいと思う指標をはかる。							
(その他本構想における取組の達成目標)							
地域の方々と交流を持ち、協働することへの生徒の満足度						単位：％	
c	本事業対象生徒：		88	80	90	90(R4)	
	本事業対象生徒以外：	50	50	73	60	70	70(R4)
目標設定の考え方：主体的な学びにつながっているかをはかる。							

2. 地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）						
	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(令和4年度)
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、高等学校において設定した活動指標) 外部講師による講義や研究会の実施回数					単位：回
	3	3	13	15	20	20(R4)
目標設定の考え方：研究開発の専門性を高めるために外部講師に委託する。						
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、高等学校において設定した活動指標) 商品開発に際し、関係機関と生徒の会議の回数					単位：回
	0	5	10	8	10	10(R4)
目標設定の考え方：生徒が直接地域と方々と交流を持ち、課題に取り組む。						
b	(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、高等学校において設定した活動指標) 研究開発成果の発表会の回数					単位：回
	1	1	1	2	3	3(R4)
目標設定の考え方：地域に開かれた学校づくりを目指す。						
b	(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、高等学校において設定した活動指標) 校外に向けてイベントなどで学びを発表する回数					単位：回
	3	3	3	8	10	10(R4)
目標設定の考え方：研究開発の成果を広く校外に発信をする。						
b	(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、高等学校において設定した活動指標) 「食」、「福祉」等に関する各種コンテストに参加した生徒の割合					単位：%
	100	100	100	100	100	100(R4)
目標設定の考え方：生徒の学びの到達度を測る。						
c	(その他本構想における取組の具体的指標) 地域のことが好きな生徒の割合					単位：%
	50	65	67	85	95	90(R4)
目標設定の考え方：地域に対する生徒の愛着度をはかる。						

3. 地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）						
	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(令和4年度)
a	(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) コンソーシアムの委員会の開催回数					単位：回
	0	0	2	4	4	4(R4)
目標設定の考え方：研究開発の進捗状況をはかる。						
b	(その他本構想における取組の具体的指標) 協働に際し、地域と企業で人材が参画した人数					単位：人
	10	10	13	20	30	30(R4)
目標設定の考え方：連携機関の充実度をはかる。						
b	(その他本構想における取組の具体的指標) 校内外の探究活動などの教育活動に協力した地域の方々の延べ人数					単位：人
	50	70	10	90	110	100以上(R4)
目標設定の考え方：地域連携の充実度をはかる。						

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度
全校生徒数（人）	625	587	558	575	528
本事業対象生徒数			108	115	101
本事業対象外生徒数			450	460	427

『「食」を通じてローコスト・ハイクオリティ社会の実現を目指すプロフェッショナル人材の育成』 ～佐用風土(Sayo Food)を活用したモデルプランの構築～

【研究開発の背景】

佐用町の強みと弱みを課題設定の軸に捉え、佐用高校家政科での学びにリンクさせた上で、協働事業を考察することでカリキュラム開発に繋げる。その中で生徒のさらなる能力向上と地域への貢献を同時に展開することを目標とする。

佐用町の強み

- 「播磨国風土紀」か記す歴史と伝統
- 肥沃な土壌
- 兵庫・岡山・鳥取を結ぶHUB TOWN

佐用町の弱み

- 老年人口率40%（全国平均の1.5倍）
- 急激な人口減少（5年間で半減）
- 大規模河川災害

「食」に通じた、佐用を支えるプロフェッショナル人材の育成

- 佐用高校課題解決3施策
- 「佐用風土(Sayo Food)」商品開発
- 「高校生訪問サービス」実施
- 「保存食・非常食」開発

佐用町課題解決3方針

- 佐用の特産品を活用（商品開発・マーケティング）
- 佐用で暮らす人を守る（健康寿命延伸）
- 佐用の水害から学ぶ（安全安心な町づくり・災害レジリエンス）

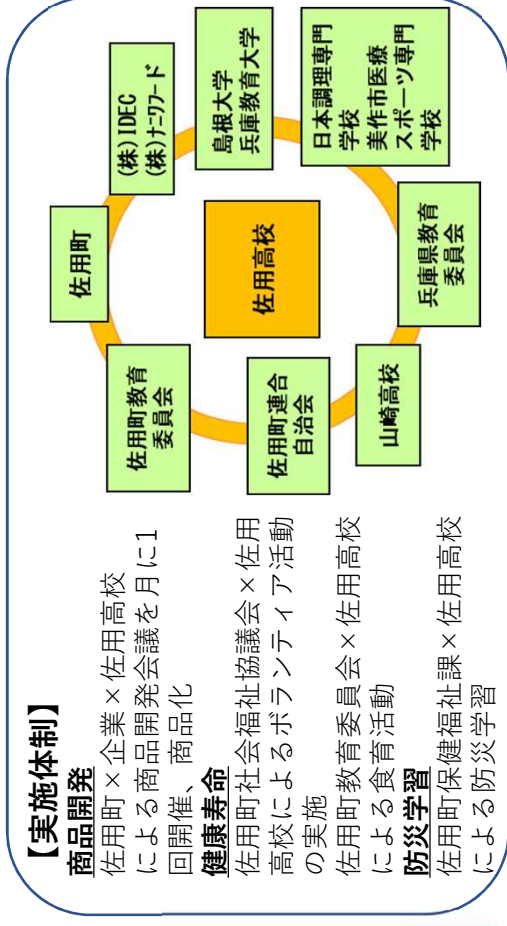
【実施体制】

商品開発
佐用町×企業×佐用高校
による商品開発会議を月に1
回開催、商品化

健康寿命
佐用町社会福祉協議会×佐用
高校によるボランティア活動
の実施

佐用町教育委員会×佐用高校
による教育活動

防災学習
佐用町保健福祉課×佐用高校
による防災学習



【令和3年度の目標】

- 各取組を通して、生徒に様々な力を身に付けさせ「総合実践力」として定着させる。
- 三本柱毎の授業実践の中で教科横断的な内容を意識し、カリキュラム・マネジメントを行う。
- 地域や協働先との活動における主体性の向上と、専門知識と技術習得の深い学び。

【取組状況】

協働先

- ・ 佐用町 企画防災課 保健福祉課 社会福祉協議会
- ・ IDEC
- ・ ナニワフード
- ・ 佐用消防署
- ・ 瓜生原亭
- ・ 佐用保育園
- ・ 利神保育園
- ・ 子育て支援センター
- ・ 佐用小学校
- ・ 美作市スポーツ医療看護専門学校

佐用の特産品を活用
(商品開発・食育活動・開発商品の広報・販売活動)



開発商品の広報販売会

佐用で暮らす人を守る
(高齢者食生活調査・食改善レシピ開発)



高校生訪問サービス

佐用の水害から学ぶ
(災害時保存食開発・避難時支援者育成)



防災バックキッキング講習会



「高校生カフェ」in.瓜生原



給食サービスボランティア



佐用合同防災訓練

【成果】

商品開発

- 「夢茜トマトソース」「佐用もち大豆入り夢茜トマトカレー」
- 「佐用もち大豆コンテスタ」で4名入賞
- 地域の特産品を使用し開発した献立や商品を地域に還元

健康寿命

- 専門学校での研修により福祉に関する専門知識と技術の習得
- 幼児から高齢者まで幅広い年代に対する「食育」活動
- 地域高齢者に対する「フレイル予防体操」の提案

防災教育

- 「佐用町合同防災訓練～KIZUNA大作戦～」を企画運営
- 地域住民への防災意識調査と小学校「防災出前授業」の実施
- 災害備蓄食の開発と「災害マニユアルブック」の制作

その他

- 地域との協働による体験活動の中で生徒の主体性が育まれ、資格取得や学力向上意識の高まりがみられた一例
- 全国高等学校家庭科技術検定「三冠王」の取得者増加
- 「色彩検定」受験者と取得者の増加

【課題】

- 教科や学年、学科を越えてのカリキュラム・マネジメント
- コロナ禍における地域との交流活動（リモート交流の併用）
- 成果物やアンケート結果の具現化と「指導と評価の一体化」
- ルーブリックやパフォーマンスタセス評価を活用した指導計画

令和2年度入学生 実施教育課程

兵庫県立佐用高等学校

学年	学科	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
令和2年度 第1学年	家政科	国語総合②	現代社会②	数学Ⅰ②	化学基礎②			体育③			保健①	書道Ⅰ② 美術Ⅰ② 音楽Ⅰ②	C英語Ⅰ③		家庭総合④							生活産業情報②	フードデザイン②	ファッション造形基礎②	生活産業基礎①	総合的な探究の時間①	LHR①						
令和2年度 第1学年	家政科	国語総合②	現代社会②	数学Ⅰ②	化学基礎②			体育③			保健①	書道Ⅰ② 美術Ⅰ② 音楽Ⅰ②	C英語Ⅰ③		家庭総合④							生活産業情報②	フードデザイン②	ファッション造形基礎②	生活産業基礎①	総合的な探究の時間①	LHR①						
令和3年度 第2学年	家政科	国語総合②	現代社会②	数学Ⅰ②	生物基礎②			体育③			保健①	C英語Ⅱ②	音楽Ⅱ② 美術Ⅱ② 書道Ⅱ② 現代文B②	ファッションデザイン② 食文化②	生活と福祉②						※伝統文化②	生活産業基礎①	フードデザイン②	ファッション造形基礎②	服飾手芸② 調理②	LHR①							
令和3年度(案) 第2学年	家政科	国語総合②	現代社会②	数学Ⅰ②	生物基礎②			体育③			保健①	C英語Ⅱ②	音楽Ⅱ② 美術Ⅱ② 書道Ⅱ② 現代文B②	調理② ファッション造形②	生活産業基礎①	生活と福祉②					※ヒューマンサービス②	フードデザイン②	ファッション造形基礎②	課題研究②	LHR①								
令和4年度 第3学年	家政科	現代文A②	地理A②	科学と人間生活②	体育②			C英語Ⅱ②			現代文B② ※総合音楽② ※アートクラフト② ※総合書道②	数学A② 生活産業情報②	服飾手芸③ 調理③	子どもの発達と保育②	フードデザイン③							ファッション造形③	課題研究④	LHR①									
令和4年度(案) 第3学年	家政科	現代文A②	地理A②	科学と人間生活②	体育②			C英語Ⅱ②			現代文B② ※総合音楽② ※アートクラフト② ※総合書道②	数学A② 生活産業情報②	調理③ ファッション造形③	保育基礎②	※伝統文化②							※ヒューマンサービスⅡ②	フードデザイン②	※フードスペシャリスト②	課題研究②	LHR①							

注釈： 上段は現在の教育課程を反映しているが、本事業を行うにあたって下段のカリキュラムに変更予定である。
 ※は学校設定科目である。
 従来からの変更点は、網掛けで示す。

「家政科 1日限定カフェ 地元の味でおもてなし」



この日のために考案した弁当を振る舞う佐用高校生＝佐用町平福

佐用高家政科が1日限定カフェ

地元の味でおもてなし

考案した弁当や焼き菓子販売

佐用高校家政科の生徒に
よる1日限定のカフェイベ
ントが13日、佐用町平福の
古民家交流施設「お休み
処 瓜生原」であった。
生徒らは町特産の食材をふ
んだんに使った弁当や焼き
菓子を販売し、訪れた町民
らをもてなした。

「課題研究」の授業の一
環で、食物専攻の3年生15
人が取り組んだ。弁当の献
立は9月から試行錯誤し、
キノコの炊き込みご飯やシ
カ肉のハンバーグ、「さよ
う姫ポーク」のしょうが焼
きなど9品目に決定。それ
ぞれが担当する料理を前日
から仕込み、弁当30膳と焼
き菓子を用意した。

オープン前から客が並
び、店内の飲食スペース
はすぐに満席に。生徒ら
は接客や会計など役割を
分担してカフェを運営し、
訪れた客との交流も楽しん
だ。

「色合いや味付けにもこ
だわった。佐用の食材のお
いしさを届けられてよかつ
た」と同科3年の山下遙さ
ん(17)。友人3人と近くか
ら訪れた女性(73)は「どれ
もおいしい味付け。初めて食
べるシカ肉もおいしい」と笑
顔だった。(勝浦美香)

「家政科 商品開発販売」



姫路城周辺で 音と食が協演

街角でさまざまな音楽を演奏する「第4回姫音楽祭」(ひめじあかり実行委員会主催)が28日、世界文化遺産・国宝姫路城の周辺で開かれた。約120組のバンド演奏やダンスがステージを彩り、食べ物をおオーケストラに見立てたオードブル弁当も限定販売。家族連れらが秋晴れの下、音と食の協演を楽しんだ。(直江 純)

姫音楽祭

120組がバンド演奏やダンス オーケストラ表現の弁当も



食材をおオーケストラに見立てた弁当を購入した家族連れ。佐用高校生はトマト製品を売り込んだ

城見台公園でケラントピアノを演奏するユーチューバーの「よみい」さん。若いファンたちも動画を撮っていた。いずれも姫路市本町

昨年は新型コロナウイルス禍でオンライン限定となり、野外開催は2年ぶり。メイン会場の大手前公園では、和太鼓によるオープニングに続いて高砂高校ジャズバンド部が「サンタが街にやってくる」などを元気に演奏した。

トランプット担当の2年生、土生田紗英さん(17)は

「オードブル弁当も限定販売。レジ待ちの行列が延びると、隣にブースを構えた佐用高校家政科の生徒らがオリジナルのトマト製品を売り込んでいた。

天守を借景に観客を沸かせた。イグレひめじでは、市内18店がレンコンやタコなどの地元食材を盛り込んだ弁当を「シェフたちのオードブル」と題して500食限定で販売。レジ待ちの行列が延びると、隣にブースを構えた佐用高校家政科の生徒らがオリジナルのトマト製品を売り込んでいた。

いまそら 手塚山 会館 0120 432096

姫路市網干区から入学したが、コロナ禍で集まりにくく練習には苦労してきたといい「地元の人々さんの人を前に演奏できてうれし」と満足そうだった。城見台公園では、ピアノユーチューバーの「よみい」さんがゲスト出演。「残酷な天使のテーゼ」などの人気曲を軽快に響かせた。他にも腕自慢の市民がよろいかぶと姿で演奏し、大

「合同防災訓練～KIZUNA 大作戦～」

2021年(令和3年)12月28日 火曜日

訓練でグラウンドに避難する佐用高校の生徒や佐用小学校の児童ら＝佐用高



佐用高生が訓練初企画 地域防災へ住民らも参加

佐用高校家政科の2年生が初めて企画した地域との合同防災訓練「KIZUNA（きずな）大作戦」が同校であり、全校生徒500人のほか、近隣住民や佐用小学校の児童、県立大の学生らが参加した。同科が町と結んだ包括協定の目標に「安心安全なまちづくり」があることから計画。避難所で過ごす際の知識や、日頃の備えについてもアドバイスした。

同科の2年生は秋以降、防災心理学などを専門とする県立大環境人間学部の木村玲欧教授らと学びを深め、準備を進めてきた。本番では町職員や消防署員の協力も得た。

山崎断層帯地震を想定した避難訓練では、同科の2年生がスピーカーを備えたドローンで誘導。全校生徒とともに、あらかじめ佐用高に集まっていた地域住民や佐用小の1年生らがグラウンドへ避難した。

避難生活では温かい食事が不安を和らげることから、焼き鳥の缶詰や無洗米をビニール袋に入れて温めるパック調理のコーナーも設けた。家政科2年生が同学年の生徒に指導し、実際に作って試食した。地域住民向けに、新聞紙を使った紙皿やマスク作りの体験プログラムもあった。

近くから参加した自治会長の上村若葉さん(72)は「知らないことばかりで勉強になった。高校生たちが頼もしく見えた」。同科2年の上村若葉さん(17)は好評な様子に「一生懸命話を聞いてくれて良かった」とほっとした表情を見せた。

(勝浦美香)

令和4年2月6日（日） 神戸新聞 朝刊

「地域との協働事業発表会」

食を通じた社会貢献策提案 佐用高校家政科が研究発表

食を通じた地域課題解決の研究内容を発表する佐用高校生「さよう文化情報センター」



佐用高校家政科の生徒が5日、佐用町佐用のさよう文化情報センターで、「食」を通じた地域課題解決の研究内容を発表した。地元特産品を使った備蓄食や栄養面に配慮した高齢者向け宅配弁当、災害用非常食作りなどについて、来賓ら約70人に写真や動画を交えて紹介した。

文部科学省の高校教育改革推進事業の一環で、同事業の指定を受けた佐用高では2020、22年度、食を通して地域を支える人材を育成する。家政科3学年の約90人が、商品開発、健康寿命延伸、防災の3分野に分かれて取り組んでいる。

健康寿命延伸のグループは、姫路市の日本調理製菓専門学校と協力して高齢者への配食サービスの献立を考案。衛生面のほか、食べやすいように食材の硬さや厚さに注意して調理した。今後の課題として、食と生活の改善を提言していく必要性を挙げた。

商品開発のグループは地元特産の野菜などを使った備蓄食や弁当、焼き菓子を町内外で販売。防災のグループは地域住民との防災訓練で、ポリ袋を使った非常食作りを実践した。

22年度は、学びの成果を地域で生かすことを掲げる。2年の岡田萌夏さん(17)は「今後も地域住民の意見を取り入れ、研究に生かしたい」と話した。

(村上晃宏)

備蓄食、災害用非常食など
究内容を発表した。地元特産品を使った備蓄食や栄養面に配慮した高齢者向け宅配弁当、災害用非常食作りなどについて、来賓ら約70人に写真や動画を交えて紹介した。

健康寿命延伸

～佐用で暮らす人々を守る～

高齢者食生活調査、食改善レシピ開発などを行う

- 1年生：地域実態調査
- 2年生：地域課題改善策の提言
- 3年生：高校生訪問サービス

佐用の特産品「もち大豆」
を使用したパウダーです

もち大豆ミックスパウダー



夢茜トマトジャム

佐用の特産品「夢茜トマト」
を使用したジャムです

商品開発

～佐用の特産品を活用～

商品開発、食育活動、開発商品の広報、販売活動などを行う

- 1年生：基礎学習、食育活動
- 2年生：「佐用風土(Sayo Food)[※]」を使った商品開発、食育活動
- 3年生：高校生カフェ、レシピ本発行

※佐用風土 (Sayo Food)

佐用の農産物や特産品をブランド化している

佐用高校

私達の学び舎は、
普通科、農業科学科、家政科の3つに
分かれています。今回紹介するのは
家政科の地域協働の活動です。

地域協働って？

『【食】を通してローコスト・ハイクオリ
ティ社会の実現を目指す
プロフェッショナル人材の育成』
をすること！！

災害に強い町づくり

～佐用の水害から学ぶ～

災害時保存食の開発、災害時支援者育成を行う

- 1年生：防災学習、佐用について学ぶ
- 2年生：保存食、非常食開発
- 3年生：減災対策の提言

地域と学ぶ

佐用高校

令和2年度指定
地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型）
研究開発実施報告書【2年次】

発行日 令和4年3月

発行者 兵庫県立佐用高等学校
〒679-5381
兵庫県佐用郡佐用町佐用260番地
TEL 0790-82-2434
FAX 0790-82-2719
HP <http://www.hyogo-c.ed.jp/~sayo-hs/>



兵庫県立佐用高等学校

